

國學院大學学術情報リポジトリ

文学展示の歴史：明治期から昭和戦前期まで

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐川, 果蓮 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001403

文学展示の歴史

—明治期から昭和戦前期まで—

History of Modern Japanese Literary Exhibitions; From the Meiji Era to the Prewar of the Showa Era

佐川 果蓮

SAGAWA Karen

はじめに

文学館とは文学者や文学作品に関連する資料を収集・展示する博物館であり、その数は全国で700館以上にのぼるとの算出もある⁽¹⁾。しかし文学館に関する研究は他の分野の博物館（歴史系博物館、美術館など）よりも少なく、その研究史も浅い。岡野裕行は文学館研究が盛んになったのは平成7年（1995）以降であり、その要因として、文学館の数が急増した時期であること、全国文学館協議会が発足したこと、文学館に関する雑誌記事、出版物が増えたこと、社会的認知度が高まったことを指摘している⁽²⁾。そして現在、文学館研究における論考は、文学館の役割や機能を論じる文学館機能論と各館の運営や展覧会など個別の事業報告といったものがその大半を占めている。

そうした中で、「文学館通史」といったものは未だ構築されていないのが現状である。昭和42年（1967）に開館した日本近代文学館が文学館史における草分け的存在であるのは自明のことだと言えるが、それ以前に存在した文学館及び文学展示に意識が向けられたことは少ない。文学研究者であり、日本近代文学館の職員でもあった大木志門は戦前の文学館設立運動⁽³⁾、目録による戦前文学展示の調査⁽⁴⁾、近代文学資料の価値形成に関する論考⁽⁵⁾を発表しているが、博物館学の視点から論じたものは少ない。駒見和夫の「文学系博物館小考」⁽⁶⁾は文学館を「文学系博物館」という枠組みで捉え、その変遷をまとめたものであるが、戦前の文学展示については言及されていない。しかし、日本近代文学館成立以前から、様々な場で文学展示は行われており、現在ではその場が文学館に移動していった。そのため「文学館通史」形成には、前段階としての「文学展示」の調査が重要であると考えた。そこで本研究の目的は文学展示に焦点を当て、その発展の歴史を明らかにすることである。

なお本論では日本の「文学」の始まりとして、芸術としての小説論を述べた坪内逍遙『小説神髓』（1885～1886）を規定し、文学展示においても、逍遙以降の作家、作品を対象とした展示を対象とする。また紙幅の都合上、昭和戦前期までの文学展示を対象とする。

1. 「文学展示」の黎明期

（1）「第二回紅葉祭」

日本最初の文学展示が行われたのは、明治37年（1904）12月16日に開催された第二回「紅葉

祭」である。「紅葉祭」とは明治36年10月に死去した尾崎紅葉の慰霊祭のことで、紅葉が生まれたのが慶応3年（1868）の12月16日（旧暦）であることから、その誕生日に合わせて開催されるようになった。

第一回の「紅葉祭」は紅葉が亡くなった年である明治36年の12月16日に開催されている。場所は東京・芝公園内にあった紅葉館という高級料亭。明治14年に建てられた紅葉館は『新撰東京名所図会』によれば「十五疊二間、十八疊一間、別に十疊一間、三間四枚なる絹張の襖には楓葉を金銀の模様に撩亂して、引手、釘隠に至る迄悉く楓葉を型とり⁽⁷⁾」などした、趣向を凝らした純日本風の建物である。大人数での会にも使用できる大規模な料亭で、文人や政治家などのサロンとして使用され、紅葉を含む硯友社の作家もよく使用していたという。

この場所で行われた第一回「紅葉祭」は遺族や友人などが列席し焼香をしたり、それぞれ演説をしたりといった内容であった。床の間には紅葉の写真、焼香台の横には『金色夜叉』に関する鍋木清方作の軸がかけられていた⁽⁸⁾。このように第一回は一般的な慰霊会の範囲であり、紅葉自身の遺墨や遺品を展示したことは確認できない。

しかしその1年後に行われた第二回「紅葉祭」について、以下のような記事が確認できる。

来る十六日午後二時より芝公園紅葉館に於て紅葉祭第二回を開き、故山人が遺墨遺品展覧、同遺筆絵葉書発行等を議し終つて（略）余興を行う由発企人は硯友社の（略）諸氏にて会費金二円何人と雖も出席し得る由なれば故山人を追慕する諸氏は至急紅葉館内発企人宛申込まるべしといふ⁽⁹⁾

当日は余興を行うほか、紅葉の遺品や遺墨を展覧するとある。さらには遺筆の絵葉書の発行まで予定されている。この「遺墨遺品」ほとんどの詳細は不明ながら、分かっているものには「印章」がある。これは紅葉が生前に発注していてその完成を見ることのなかったものであったといい、



図1 紅葉館の内観

小川一真 1911『東京風景』小川一真出版部より

故人を偲ぶものとして展示された。発起人は硯友社の巖谷小波、石橋思案、川上眉山、広津柳波、江見水蔭、小栗風葉、泉鏡花といった文学者たちで、当日の参加者は約200名。案内状も出されており、ほとんどが紅葉の友人や門下生、文学者、画家などであったという。さらに予告されていた余興に加え福引も開催され賑わったようである⁽¹⁰⁾。

初の文学展示はこのように慰霊的要素の中で成立した「個人文学展示」であった。そしてそれは関係者向けのイベントで、娯楽要素も含まれていたことがわかる。命日ではなくその誕生日に会を設定したように、出席者で楽しみながら慰霊をし、そのトピックとなるよう、故人を偲ぶものを展示したと考えられる。

(2)「二葉亭四迷追悼會」と「夏目漱石遺墨展覽會」

第二回「紅葉祭」の次に古い文学展示と考えられるのは、大正2年(1913)7月26日に開催された「二葉亭四迷追悼會」である。二葉亭四迷は明治42年(1909)に死去しており、その4年後に同会は開催された。これは四迷初の全集、『二葉亭全集』の最終第四巻が刊行されたことを契機としたもので、内田魯庵や坪内逍遙、大田黒重五郎などの知人と朝日新聞社が発起したものである。会場は上野精養軒、ここは四迷がロシアに行く際の壮行会でも使われたといった縁から選ばれたようである。参加者は「男爵後藤新平(略)、朝比奈知泉、巖谷小波、昇曙夢、松居松葉、田口掬汀、柳川春葉、吉井勇、長田秀雄、夏目漱石、饗庭篁村、永田幹彦、半井桃水、長谷川天溪、中村楽天、松原二十三階堂、生方敏郎、関如来など⁽¹¹⁾」とあり、政治家や文学者、評論家など60名余りが参加した。

追悼会では祭祀の読み上げや代表者のスピーチ、会食が行われた。その時に四迷の遺墨・遺品を展示した様子が確認できる。

式場に充てたる洋館階下の大休憩室には、個人の油繪肖像を祭りて諸種の神饌を備へ、其の傍側には故人が在りし世の面影を偲べよとか、様々の遺墨、遺品の陳列あり(略)「夜討曾我」の原稿を始め「其面影」や「平凡」、「懺悔」、「入露記」「血笑記」などの原稿あれば、未だ世に知られざりし「俳諧手録」や独歩の「牛肉と馬鈴薯」を露文に譯せしがあり、或は三歳の頃より愛玩せし四種の繪卷物、士官學校の入學願の不合格書、露国美人の繪はがきブックがあり、中にも最も思ひ出深きは、故人が學生時代より露西亜に赴くまで愛用したる古机にして最初四脚の長かりしを座敷用にするため、短く切断したる粗末極る物なれども、二葉亭一代の作物が悉く此の机に依りて生れたるを思へば無限の興趣あり⁽¹²⁾

ここでは四迷の未発表の原稿や幼いころから気に入っている絵巻物、士官学校の不合格書まで展示されていたようだ。そして注目したいのが文机を四迷の作品が生まれていった場所として「無限の興趣」があると強調している点である。作家の遺愛の品を通じてその執筆の様子を想像し、そこから数々の作品が生まれたのだと思いを馳せる観覧者は、現代における書斎の再現などの文学展示を享受する観覧者の姿と何ら変わりがない。遺品が故人を偲ぶための材料としてではなく、文学作品の成立を想起させる道具として機能しているといえる。しかし、故人を

追悼するという目的の中で遺族や知人、関係者が集まって文学展示を行う・観覧するという点は未だ第二回「紅葉祭」と同じ性質を持つ催しであるといえる。異なる点としては、全集の出版に関連しているという点である。

同じく本の出版を背景に開催されたのが、「二葉亭四迷追悼會」の後に行われた「夏目漱石遺墨展覧會」である。これは大正9年10月9、10日に東京・日本橋倶楽部で、10月16、17日は京都に場所を移して開催された。漱石の弟子の小宮豊隆が発案し、その目的は「文豪夏目漱石先生の遺墨を一堂に蒐めて見せると共に『漱石遺墨集』を編して後世に傳へやう⁽¹³⁾」というものだった。漱石お気に入りの書画類は夏目家が多く持っていたものの、それ以外は漱石の弟子たちの手元にあたり、遠いところでは大連にまで散らばっていたそうである。この展覧会では漱石の妻・鏡子の呼びかけもあり、そうした遺墨が借用され、展示品となった。

ここで展示されたものは現代の漱石展顔負けの、またはそれより豪華なものであった「坊ちゃん」「三四郎」「彼岸過迄」「こころ」「明暗」などの長編小説の原稿、漱石の画、正岡子規が赤を入れた俳句原稿など。また漱石山房にも掛けられていた名月の書、漱石が手本としていた良寛の書などのコレクションが展示された。作中に現れるものとして「硝子戸の中」に描かれている夏目家の飼い犬の墓標も展示された。初期のものからその晩年に至るまで、網羅的に遺墨や遺品が展示された。

またこの展覧会は京都にも巡回し、大衆に向けて広く公開された展覧会でもあった。遺墨集の発売という事業の前段階という背景を持っていたために、漱石を追慕する人はもちろんだが、文学者・夏目漱石に興味がある人、漱石の文学作品に興味がある人に向けた展覧会でもあったのだ。「紅葉祭」から続く慰霊祭的性格は引き継ぎつつも、本の出版と関連した催しとして徐々に「個人文学展示」は広がりを見せていった。

（3）「大人自由畫展覧會」

大正9年（1920）7月14日から19日にかけて大阪・高島屋で「大人自由畫展覧會」が開催された。そもそも「自由画展覧会」とは、大正8年に長野県の小学校で行われた「児童自由畫展覧會」に端を発した児童のための芸術教育の一環である⁽¹⁴⁾。これを参考に、かつ「遊戯的」に計画されたのが「大人自由畫展覧會」であった⁽¹⁵⁾。展示対象となったのは「日本画、洋画、彫刻家は元より思想家、小説家、詩人、新聞記者、政治家、官吏、実業家、軍人など⁽¹⁶⁾」であった。「絵画清談」の記事によると、文学者の出展は以下の通り。

主なる顔觸れには御常連の小波、鳴雪、硯海、紫舟氏等を初め、秋聲、花袋、孤蝶、伸、哀果、晶子、柳江、無想庵、荷風、正雄、大槐、水蔭、武郎、龍之介、春夫、甲之、藤村、小劍、星湖、敏郎、文夫（朝倉）、光太郎、信水將軍其他數々あつてそれぐに面白かつた。参考陳列に漱石、泡鳴、乙字等があつたが、漱石の書は定評の如く妙味津々たるもの、畫として巖頭の松、四君子の短冊等があつたが、矢張り獨特の神韻があり且つ相當に堂に入つたものであつた。⁽¹⁷⁾

詳しい出展品は分かっていないが、南画、書、洋画などが展示され⁽¹⁸⁾、かなりの数の文学者

が取り上げられていたことがわかる。この展覧会は文学を軸とした展示ではないが、ここで注目したいのは政治家や官吏、または本職の画家と並び文学者の出展があったということである。つまり大正期にはすでに文学者が人々の注目を集め、興味を引き、参考となる存在であり、娯楽的な展示の対象として鑑賞に耐えうる存在であった。

2. 昭和戦前期における文学展示

(1) 「総合文学展示」のはじまり

昭和2年(1927)1月19日から23日にかけて、「明治文藝研究資料展覧會」が松屋銀座店にて開催された⁽¹⁹⁾。主催の愛書趣味社は、書痴と称された古書収集家の斎藤昌三が創刊した雑誌「愛書趣味」を出版していた出版社である。その斎藤はもちろんの事、木村毅、柳田泉、青山督太郎といった研究者、活字問屋も協力、改造社の後援もありこの展覧会は実現した。目的は「文壇及び研究科家の参考となる⁽²⁰⁾」こと、木村によれば今まで青山会館や牛込会館などで行われていた古本即売会を百貨店で行うことを想定していたようだ⁽²¹⁾。展示されたのは明治30年間に発刊された文学雑誌や小説、評論などの書籍で、その展示総数は1800冊にものぼった。これまでの文学展示とは違い、「明治文藝研究資料展覧會」は作家の遺品の展示はないものの、複数の文学者の書籍を取り扱っていることから「総合文学展示」に近い形である。

実際の様子は「愛書趣味」本誌で報告されている。これによると、まず開催に当たってはかなり駆け足で準備がなされたようで、「新聞雑誌に豫報する手配すら間に合はず、その上出陳書目も(略)やつと開會三日目の夕方出来した騒ぎ⁽²²⁾」だったという。しかし広告が不十分だったにも関わらず、総入場者数は約10万人。会場の約100坪が手狭に感じるほどであったようだ⁽²³⁾。展示ケースの配置についても概要が残されており、当時の文学展示の様子が詳しく分かるため以下に引用する。

会場は前述の通り七階で、エレベーターを昇り切った入廊下は、六尺の大ケース八個に、明治初年から三十年までの文学関係雑誌を一直線に並べた。それに續いて、入り口近くの左右四個の大ケースには、二個に創世記の新體詩歌俳書を、二個には明治年間の代表的装幀を参考として年代順に収めて置いた。

入口には、本誌讀者友の署名又は名刺受を設備して置き、室内は、中央に二ヶ所の陳列臺と二個の大ケースを設けた。入口に近い方の陳列臺は舊體小説、圖書研究の書誌文藝批評及び坪内博士の作品のみを一の試みして一括し獨立したケースに陳列して見た。後になって、この作家別の陳列法も面白いことと悟った。

他の一つの陳列臺は、戯作文学、贊助者出品及び第三部品を全部として、社會文獻の問題化そうと思はれるのは一括して之亦ケース内に収めた。

以上の他は右二臺を取廻いて室の周圍に設備した陳列臺に、年次順に四冊宛並ぶやうにして、入口を右に折れて、明治二十年前後からの所謂新體小説、政治小説、反譯小説、哲學關係、明治初期雜著の順で一周し終つて出るやうにし開港圖繪は光線を直面にし得る二壁面を利用して掲げた。⁽²⁴⁾



図2 会場外廊下の様子
「明治文藝研究資料展覧會概況」
1927『愛書趣味』第2巻第3号より



図3 会場内の様子
「明治文藝研究資料展覧會概況」
1927『愛書趣味』第2巻第3号より

「六尺の大ケース」とは、横幅が6尺つまり約1.8m、縦は文芸雑誌3冊を縦位置で並べて置ける程度の長さのもので、高さは大人の腰のあたりの覗きガラスケースである〈図2〉。これを廊下に一直線に8個、入り口前には左右にも2個ずつ並べたというから廊下だけでかなりの資料数である。展示室内には中央に大ケースと陳列台を2つずつ置き、壁側には部屋を取り巻く形で陳列台が置かれた。陳列台の詳細は不明だが〈図3〉では露出している資料もあり、手に取ることもできたと予想される。

展示の流れに着目すると、廊下には文芸雑誌の初版、初期の新体詩歌俳書、代表的な雑誌を年代順に並べることにより、導入部分で展示の概要を説明できるようになっている。また初版の貴重なものを配置することにより観覧者の注意を引く効果があったものと思われる。会場内では「旧体小説」（仮名垣魯文、三遊亭圓朝など）、図書研究の書誌、「新体小説」（尾崎紅葉、幸田露伴など）、政治小説といったようにジャンル別で資料が展示された。その中で賛助もしている坪内逍遙の作品は一つのジャンルとしてまとめて展示されたが、こういった作家別の展示方法も面白い試みであったと書かれている⁽²⁵⁾。

以上のように「明治文藝研究資料展覧會」では初期の「総合文学展示」であり、文学ジャンル別展示、作家別展示、年代順展示が試行された展示であった。今までの「個人文学展示」では実現しなかった、テーマ分けされた展示が誕生した展覧会であると言える。その一方でやはり展示方法の荒さは指摘されており、「洋冊に一々小枕をして、少し仰向かして欲しい⁽²⁶⁾」という意見や、初版雑誌に対して、「印象も雑漠たらざるを得ずと考へ候。その内の一二種（略）之を五年目每位宛に比較的にされたならば、且その目次の部分をしめされたならば、かなり面白き事と思はれ候。文壇の異動變遷等も判る⁽²⁷⁾」と指摘している。現代のような演示具やキャプションといったものはまだまだ不十分であり、観覧者にとってはわかりにくい部分もあったようだ。また資料の多くが露出した陳列台に置かれていることは、当然ながら資料の劣化や破損、盗難による散逸などの可能性が非常に高い。特に雑誌は紙が非常に脆弱であり、こういった展示方法ではすぐ破損してしまうことが予想されるが、古書即売会のイメージの元に成立した展覧会の為、特別に留意はしていなかったようである。

またこの展覧会の目的はもともと文壇や研究者の研究に供するためであったが、結果として10万人の観覧があり、その中には子どももいた。当初の目的とは異なり、研究者ではない一般大衆にも展覧されたのだ。これには大正期に成った「文学」の大衆化が要因の一つだと考えられる。大衆化には特に二つの理由が考えられ、一つには大正6年（1917）より刊行された改造社の『現代日本文学全集』に端を発する、円本ブームである。出版業界は大正9年3月の株価大暴落から続く恐慌、大正12年の関東大震災などの影響から低迷期に陥っていた。それを打破したのが円本である。この円本の普及により今まで高価だった本が手に入るようになり、「読書」が大衆化したともいえる。大木志門によると、展覧会は「木村・柳田が関わった円本全集の宣伝の一環として、明治期本の魅力をアピールする目的」も含んでいたという⁽²⁸⁾。このように書籍、雑誌が今までよりも身近に、また興味の対象として認識されたという背景があって、展覧会にも多くの人が訪れたと考えられる。もう一つの理由として、会場が百貨店だったことが考えられる。今までは上流階級を固定客とし、高級イメージの強かった百貨店（呉服店）であったが、震災でほとんどの建物が損壊、火災の被害にあう。しかしすぐにバラック店舗で被災者へのサービスとして生活必需品の販売を開始した。これにより、従来の敷居の高い百貨店のイメージが一般大衆の中で親しみやすいものへと進化していった⁽²⁹⁾。会場となった松屋銀座店は大正14年5月1日に開業してから、従来の下足預かり制度の廃止や、東洋一とも称された内装や設備などから人気を博しており、関東大震災後に復興した本格的建築物による大百貨店の第一号でもあった⁽³⁰⁾。百貨店に買い物に来るついでに展覧会を見る、展覧会を見るついでに買い物をするという百貨店と展覧会の相互利益関係は以降も続くようになる。木村毅は百貨店に来る大衆が古本に興味があることが分かり、松屋以外の百貨店にも古本が進出したと後年に回想している⁽³¹⁾。そういった中で「明治文藝研究資料展覧會」は大正期の文学、読書文化の大衆化を背景として成功をおさめ、文学展示の集客性を強く示したと言えるだろう。

そして現在のような「総合文学展示」が確立したのは昭和5年（1930）10月22日から31日にかけて銀座松屋にて開催された「明治大正文豪遺墨展覧會」であろう。主催は読売新聞社で、明治以降の物故文学者20人の資料を展示した過去最大規模の文学展である。以下は読売新聞社の社告である。

幾多の文豪の手になる遺墨、遺稿、遺愛品、等（略）之等の品々は歴史の経過と共に一度び散逸すれば再び手に入らぬ國家的の名寶である。我社はこの燈火親しむべきの候を期し我國最初の明治、大正、昭和期を総合する物故文豪廿氏（別記）を中心としての遺品展を思ひ立ち、関係諸家に乞うてまだ世に示されざる秘藏品数百点の出陳を得た。この公開によつて我国文学史上の重大部分が数十万人の前に活写され、更に当局者並に世の識者をして我国にも彼の大英博物館の如く、文豪の遺品を愛蔵する博物館の必要を知らしむれば我社の目的は達せられたものである・・・⁽³²⁾

これによると、展覧会の趣旨は文学者の関係資料を展示し、世間に文学の博物館の重要性を訴えるものであった。日本近代文学館の創設よりも30年以上早い試みであり、当時の文学関係者

にとっても革新的な催しだった。これ以前にも大正11年に「日本近代詩書展」という資料の散逸を防ぐ目的の展覧会は行われている。しかし山宮允によると「詩人、愛詩家、並に文學研究者の便を計る」ため「詩的文献のコレクション」の散逸を防ぎ専門図書館の実現を希求する展覧会であったとされている⁽³³⁾。この時想定されていたのは専門図書館であり博物館ではなく、一般大衆に向けての文学展示、施設構想ではなかったことがわかる。その点において、「明治大正文豪遺墨展」の性質は重要視すべきである。

展示の対象となったのは明治から昭和にかけてすでに亡くなっている文学者総勢20名である。明治期に亡くなった、北村透谷、樋口一葉、正岡子規、高山樗牛、尾崎紅葉、国木田独步、二葉亭四迷、石川啄木。大正期に亡くなった伊藤左千夫、夏目漱石、島村抱月、森鷗外、有島武郎、大町桂月。昭和期に亡くなった芥川龍之介、徳富蘆花、片上伸、小山内薫、内田魯庵、田山花袋の資料がその命日順に「都合十個の大ケースに十九家数^ま百點^ま⁽³⁴⁾」展示されたという。代表的な資料としては夏目漱石の「彼岸過迄」、樋口一葉の「たけくらべ」、芥川龍之介の「河童」といった貴重な原稿。バットを持つ正岡子規、子どもを抱く北村透谷などの写真。有島武郎は軽井沢での最期の時の遺留品など、作家の作品からその人物がわかるものまでさまざまなものが出展された。展覧会を見た島崎藤村は「書斎と云ふものに眼をつけて、そこにあつたものを中心に集めてあると云ふことが既に面白い⁽³⁵⁾」と評していることからコンセプトには「書斎の再現」があったのかもしれない。現代でも「書斎の再現」展示は多く用いられていて、特に個人文学館では必ずと言っていいほど再現されている。先述したように、「書斎の再現」は観覧者に作家の執筆の様子を想起させる効果があり、使用しているものから人となりを推測することができる。「明治大正文豪遺墨展覧會」でも芥川龍之介の展示について「故人の數多の名篇を生んだ机、インク壺、文鎮、建屏、筆置き、ペン軸、水差し、香入れ等一切の物が生前の有様を髣髴として陳列されてゐる。(略)陳列のいづれの品も故人の神経を窺ふに足りるものである⁽³⁶⁾」と評されている。

また、この展覧会の特徴としては現役の文学者たちが展示対象の物故文学者に「故人を憶ふの辞」を執筆し、展覧したことが挙げられる。芥川龍之介については菊池寛が、正岡子規については河東碧梧桐が、というように生前親交のあった文学者が言葉を寄せたものだ。これは展覧会が開催中の間、読売新聞本誌にも掲載されていた。展覧会に付随した企画として行われ、多くの現役の作家が関与するという形式は当時新しい試みである。観覧者のいる「今」と文学者が活動していた「昔」をつなげ、文学展示を身近に感じさせる効果を狙ったものであろう。

ここまでで文学展示は慰靈的性格、出版イベント的性格、古書即売的性格が複合化され、遂に資料保存の目的を持った博物館的性格の展示にまで発展していった。行われた展示や企画も現在の文学展示に近いものが成立していた。

(2) 文芸懇話会の「文藝家追慕展覧會」

「文藝家追慕展覧會」は文芸懇話会主催の文学展で、昭和9年(1934)9月20日から27日まで開催された展覧会である。この開催に至るまでの経緯をみると今までの文学展示とは異なる趣意の元に成立した文学展示であるといえる。

主催の文芸懇話会とは、昭和9年1月に発足した組織である。その計画は当時の内務省警保局長であった松本学と大衆作家の直木三十五によって持ち上がった。松本は共産主義への過激な弾圧を行い、さらに「プロレタリア文化聯盟の逆手をとって日本文化聯盟という団体を作って、国内と海外に亘り日本文化運動を展開」し「日本的な思想、即ち日本精神を高揚」⁽³⁷⁾させるための文化運動の主導を目論んだ。その国内運動に関する参加団体の一つに文芸懇話会があった。つまり松本は軍国主義の元で文芸統制を行い、それを通じて思想を一般大衆にも広めようという目的で文芸懇話会を組織したのだった。一方の直木もプロレタリア文学に反発を見せた作家であった。そのため、昭和9年、松本は直木にコンタクトをとる。

直木さんにぼくはいった。「どうも日本政府は文化の面に対して非常に冷淡だ、(略)わが国にもアカデミー・ジャポネともいうべき日本芸術院を作らせるべきだ。これが一つの目標だ。次にも一つ考えられることは、とかく私生活を題材とする私小説が多く芸術主義にかくれて、狭い視野に跼蹐しておるのが現状ではなかろうか。社会国家を考え、あるいはもっと哲学を説き世界観、人生観にふれるような文学があってもいいのではないか。そういう意味において、文学者、文士も啓発せらるべきものであるし、そういう文学者、文士を国が大いに尊重するという制度を作るべきではないか。そういう意味で私は文化連盟の一翼としてこの会を作ることを文学者諸彦によびかけようと思う。」と話した。直木さんは直ちに賛成してくれたのです。⁽³⁸⁾

この後、同年1月29日、松本と直木は白井喬二、吉川英治、菊池寛、三上於菟吉、山本有三ら文学者らと会合を行い、「思想取締には、どうしても、文藝家の奮起が必要」であり、「皇道精神の發場と、日本文化の把握を目指」し、結果的には文芸院の設立まで行うことを確認し⁽³⁹⁾、これが第一回の総会となった。続く会合は3月29日に行われ、島崎藤村、徳田秋声などの純文学作家も参加した(正宗白鳥、久米正雄、横光利一、大佛次郎、菊池寛⁽⁴⁰⁾、長谷川伸は欠席)。しかし発起人の一人である直木は2月24日に亡くなっていた。さらに広津和郎によるとこの会合の中で秋声は以下のような発言をしたという。

日本の文学は庶民の間から生れ、今まで政府の保護など受けずに育って来ましたので、今更政府から保護されるなんて言われても、われわれには一寸信用できませんね。それに今の多事多端で忙しい政府として、文学など保護する暇があるとは思われませんよ。われわれとしては、このままほつて置いて貰いたい⁽⁴¹⁾

この厳しい指摘によって会の方向性は変わり、この時に当初、想定されていた「文芸院」から「文芸懇話会」という名称にもなった。7月には岡田啓介内閣発足の為、松本も警保局長を失脚。会は当初のような文芸統制を目的とする政治色が薄れていった⁽⁴²⁾。

そのような背景を持つ文芸懇話会初の主催事業として企画されたのが、「文藝家追慕展覽會」である。6月27日に警保局長室にて文芸懇話会の小委員会が開かれ、「文学を社会的に認めさ

せることがこの会の当面の任務だといふのでその具体案として明治以降の物故作家の遺品を蒐集して展覧会を開催し期間中にこれら物故作家の慰霊祭を盛大に執行、同時に文化功労者として報いられるとの薄い文人（略）の顕彰⁽⁴³⁾」を目的とする計画が決定した。この計画には島崎藤村の「文芸記念館設立構想⁽⁴⁴⁾」も関わっていたとみられる。先述した「明治大正文豪遺墨展覧會」をみて感銘を受けた藤村には文学専門の博物館を作る構想があった。その実現の第一歩として文芸懇話会と利害が一致したともいえるだろう。9月19日には日比谷公会堂にて「文藝家慰霊祭」が開催された。内容は慰霊祭、記念講演会、慰安の夕を開催するというもので、藤村が司会を担当した。花輪で埋め尽くされた祭壇には明治以降の物故文学者200名余りが祀られ、その前には岩野泡鳴、饗庭篁村、内藤鳴雪、森鷗外、徳富蘆花、樋口一葉、芥川龍之介といった文学者の遺族が同様に200名余り集まった。記念講演会では江見水蔭や高浜虚子が講演を行ったという⁽⁴⁵⁾。

そして翌日から一週間、銀座三越にて「文藝家追慕展覧會」が開催された。展示されたのは明治から昭和にかけての物故文学者49名の資料約1200点である。当然ながら小林多喜二は除外されており、その人選にも懇話会の意図が見えたとの指摘もあるが⁽⁴⁶⁾、本論で注目したいのはその展示の様子である。改造社の依頼を受けて『文藝』に展覧会の記事⁽⁴⁷⁾を書いた保高德蔵によると展示資料は「その生年月の年代順に陳列されて、その陳列品の中央正面の壁に一々各文人の肖像寫眞を掲げ、その下に生年月日と生地名及び死去の年月日とその年齢を記」して「硝子張りの陳列棚」に「約一間に一人の割合」で展示された。つまり文学者の情報を記したキャプションの存在が確認できる。資料にもキャプションが付された形跡があり、塚原洪柿園の「書込み地圖」について「説明書きに依ると、故人は創作中に出る土地へ必ず旅行し、地勢その他を精細に調査し、地圖上のその足跡を印した土地へ朱線を入れたさうで・・・」とある。資料一点一点にそれが付されていたことは確認できないが、今までに行われた文学展示よりも展示にわかりやすい工夫がなされている。ただ保高はこれに対して「その文人が文學の如何なる分野に活躍し、如何なる代表作があるかを略記して」欲しかったと述べており、展示を見る若い人にとっては「寫眞と物いはぬ遺品をみたゞけでは、意義が少いと思ふ」と指摘している⁽⁴⁸⁾。展示された文学者の中には保高も知らない作家も含まれていて（蘇曼殊のこと）、これは観覧者の強い実感であったと思われ、未だ不十分さはあったようだ。

共通して展示されたのは、全集や単行本などの著作物である。その中でも夏目漱石『吾輩は猫である』の初版本や、国木田独歩『独歩集』、徳富蘆花『不如帰』の翻訳本といったものも出展された。また原稿の出品も数多く、樋口一葉「たけくらべ」、尾崎紅葉「金色夜叉」、森鷗外「即興詩人」といった原稿、石川啄木の「呼吸すれば胸の中にて鳴る音あり・・・」の短歌がペンで書かれたメモも展示された。さらに有島武郎、芥川龍之介の遺書、東京大学予備門における夏目漱石、正岡子規、山田美妙、川上眉山、尾崎紅葉の成績表といった紙類。小泉八雲のネクタイ、上田敏の指輪、小山内薫のパイプといった愛用品。珍しいものでは吉原大門に掲げられた福地桜痴の漢詩の原筆、岩野泡鳴のデスマスク、饗庭篁村所蔵の滝沢馬琴の文机や陶枕などといったものも展示された。展示の途中には、「故人文藝諸家之霊」を祭った霊屋が設置され、前を通る観覧者の中には脱帽し敬意を表する人もいたようである。保高はこういった

資料を見て、各文学者の著作や人間性が持ち物にも表れていて興味深いと述べている⁽⁴⁹⁾。

徳田秋声も朝日新聞に全三回でこの展覧会に関する記事を寄せている。第一回「閑却され勝ちな文人」では以下のように述べている。

文藝家の遺品展覧會はさうは行かない。遺品といつたところで、文藝家の生活が素とく普通一般人と別にさう變つてゐる譯でもないし、二三人の人を除く外は、生活が一般社會人の水準よりか、物質的には寧ろ貧弱なくらゐるので、麗々しく公衆の目の前に展観するやうなものゝありやうはないのである。たゞ文藝家の場合はそれとは趣のちがつた別の重要な意味がある。文藝は何といつても人である。時代や現境密接關係のあるのは勿論だが、一人一人の個人の存在と内的生活を外にしては藝術の生れようはない。従つて作品を研究する場合には、是非ともその人の内面生活を窺はなければならないし、また作品を読むものゝ興味は、何うしても其の人の生活まで及んで行かないではゐられない。⁽⁵⁰⁾

つまり秋声は、文学を理解し、学ぶためには作者の内的生活を知ることが大事であり、また作者の実生活は読者にとって知りたいものであるとしている。その面において文学展示は意味があり、ほかの芸術家に比べて「閑却されがち」な文学者たちにとっても意義があるものであった。

また中里介山は以下のように述べている。

物故文藝家の慰霊祭と言ふやうなものが此の程行はれた。計畫者も不透明であり、世間もあんまり重くは扱かつて居なかつたやうだが、必ずしもさう馬鹿にしたものでは無い。今に、相當の人を得て名分がはつきり分つて来れば又有用なる文化開發の助けとなるに相違ない。そもく日本程文藝の社會的認識の薄い國も珍らしい。此れは文藝家それ自身の輕つばしい故でもあらうが、又社會的教養の浅い故もある。⁽⁵¹⁾

「大衆作家」の名称を嫌い、文芸懇話会にも縁のなかった介山だが、「文藝家追慕展覧會」には一定の評価をくだしている。やはり当時の文学者には「文学」や「文学者」が正当な評価を受けずに、輕んじられているといった認識があったようだ。文芸懇話会に参加した文学者たちも、ほとんどが右派的思想ではなく、文学者の地位向上のために動いていた。そういった中で「文藝家追慕展覧會」はその成立こそ軍国主義の思想の元にできたものであったが、文学者たちが文学の必要性を社会に訴えるための「文学展示」であった。

(3) 個人文学館の成立

昭和戦前期は個人文学館誕生の時期でもある。まず、昭和3年(1928)10月に「坪内博士記念演劇博物館」が開館する。坪内逍遙の古希記念及び『シェークスピア全集』の完成を記念して設立された。コレクションは主に演劇、映画に関するもので「演劇博物館」という名前の通り文学館と定義するのは検討の余地があるが、文学者の名前を冠した博物館としては日本で初めてのものであった。

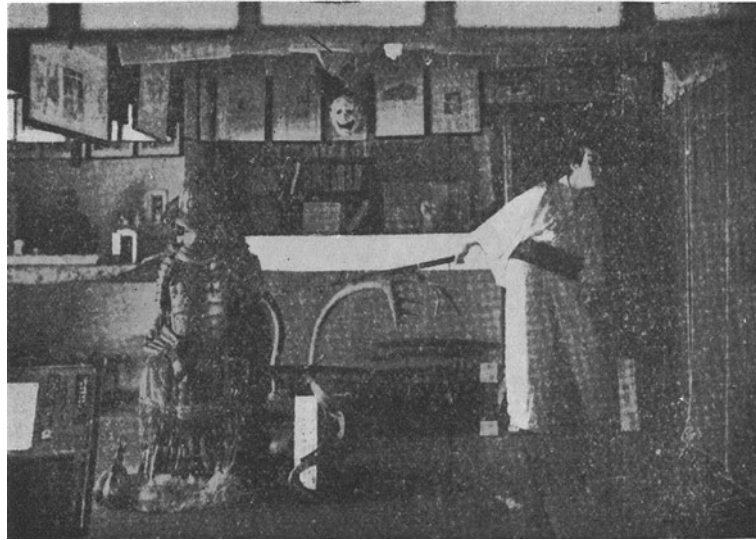


図4 大菩薩峠記念館の陳列室の様子
中里介山 1932『大菩薩峠 第十巻』より

次に昭和5年6月に「大菩薩峠記念館」（羽村市）が誕生する。中里介山作の長編小説『大菩薩峠』を冠した文学館である。『大菩薩峠形訳脚本』によると、『大菩薩峠』が帝国劇場で上演された際に介山には「一萬圓の少し上に出た」額が入ってきた。これは「今日迄の日本の演劇史になかった」ほどの金額だったという。その金を介山は謝礼などの必要経費を除き、関係者に「公共的の記念事業の爲に使用すべき」として保管してもらっていた。しかしそのことを聞きつけた政府が「眼玉の飛び出す程の重税」をかけてきたことにより、「保管金のうちから税金を支拂」い、「残れる全部を以て今の記念館を建てた」のだという⁽⁵²⁾。笹本寅『中里介山大菩薩峠』によると、介山は笹本にこの「一萬圓」を渡し、記念館建設の資金として管理してほしいと依頼している。またその時に介山は「図書館をたてたい」と発言していたようだ⁽⁵³⁾。介山は前段で取り上げた「文藝家追慕展覧會」について述べた際、「大菩薩峠記念館」にも「二千五百餘年來日本有数の文豪の爲には、記念さるべき建設の何物も残つてゐない。文學の爲の専門の建物としては、瘠せても枯れても我が大菩薩峠記念館の他には一つもないと思はれる⁽⁵⁴⁾」と言及している。他の個人文学館を見てもその成立の時期は早く、最初期の個人文学館だったと言えるだろう。

館内では、『大菩薩峠』及び介山に関する資料が展示されていた（図4）。玄関の板戸には介山筆で龍が描かれ、館内には作品が演劇として上演された際の絵看板、『大菩薩峠』の新聞広告の切り抜き、ペンなどの愛用品、龍虎の衝立（介山筆）、「大菩薩峠展」の大看板などが展示された。もちろん原稿や挿絵の原画といった紙資料も含まれる。さらに『大菩薩峠』の作品世界から、武州御岳山、京都・壬生、島原といった実際の場所の写真が額に入れられ、天井には大菩薩峠の絵が一面に張り付けられるといった展示の工夫もみられる。つまり介山に関わるものすべてが収集されていたといっても過言ではない。来館者には案内人が付き、展示品の解説がされた様子も確認することができる。その解説は介山を「先生」と呼び、展示品の紹介と共に、生い立ちや思想を称揚する内容であった⁽⁵⁵⁾。館は介山の顕彰施設としての性格が強かつ

たように推測できるが、そのコレクションの豊富さと作品世界の表現にも工夫がみられ、同時代の文学展示と比べて新規性がみられる。現在は閉館し、そのコレクションは中里介山文庫として日本近代文学館に寄贈されている。

次に開館したのは昭和9年の「小泉八雲記念館」である。その始まりは大正4年（1915）にまでさかのぼり、小泉八雲旧居当主である根岸磐井や八雲の教え子で英文学者の落合貞三郎ら有識者、そして地域の人々によって記念館建設の土壌は作られていた。昭和7年には市河三喜が「小泉八雲記念会」を発足し、翌年には多くの寄付金を集めることに成功する。その資金によって記念館建設が始まったのである。八雲の旧居の隣に建てられることになった記念館は「外形は八雲の生地がギリシアであることをも参酌し、日本の茶室の趣をも加味した雅致に富んだ様式」で「内部は正面の一部をガラス障子疊敷にして、八雲の書齋に模し、遺愛の品々をなるべく在世中の起居を想はしめるやうに配置する」という考えで作られた⁽⁵⁶⁾。展示品は原稿、衣類、トランクなどを展示した。また八雲の著作や雑誌を書棚に並べて、来館者が実際に読めるようなスペースも作られた。市河はこの記念館を通じて「八雲の人となりを後世に傳へ、ひいては地方文化の発展に資すること」になれば幸いだと述べている⁽⁵⁷⁾。つまり「小泉八雲記念館」は八雲ゆかりの地で文学展示を行うことにより、観光資源としても期待された文学館であると言える。平成28年（2016）にリニューアルオープンし、外観が変わったものの、現在も運営されている。

以上のように、昭和戦前期は個人文学館の勃興期でもあった。同時期に百貨店などで行われた「総合文学展示」とは異なり、詳細に、より深く作品や作家の生活に触れることができた。そして作家の「ゆかりの地」という付加価値もあり、その地域にとっても「個人文学館」は地域の偉人顕彰と共に観光資源としても重要な施設になっていった。

おわりに

戦前までの文学展示が持つ目的を以下のようにまとめた。

- ① 文学者の慰霊
- ② 本の出版、宣伝
- ③ 研究者・文学者への資料提供、研究補助
- ④ 文学に対する好奇心を満たす、娯楽
- ⑤ 文学者顕彰
- ⑥ 地域振興、観光資源
- ⑦ 文学資料の保存
- ⑧ 主張・思想を訴え、宣伝する手段
- ⑨ 文学（者）の社会的評価の向上

日本での文学展示はまず「個人文学展示」が慰霊の一環として成立した（①）。その発端が尾崎紅葉だったことは、紅葉が明治期の文学者の中で早世だったことに加え、文壇での地位を

確立していたことも関係しているだろう。硯友社をはじめとする関係者が慰霊の為に集い、その功績をたたえるような催しを開催できるだけの力をもった紅葉だからこそ文学展示が発生したともいえる。その後も慰霊的性格を持つ催しの中で、文学展示は存在し続ける。亡くなった後に文学展示が行われることは文学者としての生前の人気を示すことにもつながる。展示には後年の人々からも認められるような活動、作品、人間性を持った文学者の姿が照射され、遺品や遺墨は生前の文学者と観覧者をつなげるものとして機能する。

また文学の発展が印刷・出版の発展と関係があるように、文学展示も出版と関係性を持っていたことが指摘できる。大正初期の二葉亭四迷追悼会や夏目漱石の遺墨展覧会は書籍の発行に関連した催しであるし、昭和初期の「明治文藝研究資料展覧会」はまさにその出版物自体が展示の対象となった展覧会である(②)。特に「明治文藝研究資料展覧会」は、書籍を通じた文学の歴史と書籍自体の貴重性を軸に研究者向けの展示を行った(③)。これは「総合文学展示」の先駆けであり、その成功の背景にも円本ブームなど出版の隆盛が関係している。

この「総合文学展示」の発生で、テーマ立てた展示方法が行われるようになったともいえる。これまでの「個人文学展示」でも、書・絵・原稿を分けて展示が行われたことはあるが⁽⁵⁸⁾、そういった資料のジャンルではなく、文学のジャンル別や時代別による展示がなされた。複数の文学者の資料を数多く展示することは、そこに「分かりやすさ」が求められるようになる。また大正期における文学の大衆化や百貨店の隆盛に伴い、慰霊目的ではない、文学への興味や書籍への興味、買い物のついでに物見といった様々な目的をもった観覧者が発生し、意識されるようになった(④)。昭和以降、「総合文学展示」は発展を見せるようになる。

一方「総合文学展示」よりも早くに成立していた「個人文学展示」は、昭和に入るといち早くその場を「個人文学館」へと広げる。特に中里介山の「大菩薩峠記念館」の成立は「文学館史」において重要な位置を占める。流行作家である介山の資金力によって成立したこの記念館は介山に関係するものすべてが収蔵、展示された。介山の顕彰をし(⑤)、地域の観光地となったと同時に(⑥)、文学者の資料保護の必要性をいち早く示したもののでもあった(⑦)。記念館開館と同じ年、「総合文学展示」においても資料保護を目的とした「明治大正文豪遺墨展覧会」が開催された。展示内容の向上や、新規性のある企画で観覧者に対して文学館開設の必要性を訴えたものであり(⑦、⑧)、島崎藤村にも影響を与えたが、その当時に「総合文学館」開設までには至らなかった。

「明治大正文豪遺墨展覧会」から4年後、「文藝家追慕展覧会」の開催で資料の保護と共に訴えられたのが文学者の社会的地位の向上である(⑦、⑧、⑨)。江戸の戯作者に比べ、明治以降、文学者の待遇は格段に上昇したものの、いまだ保護される対象とはなっていないというのが当時の文学者たちの訴えであった。展覧会は過去最大規模の展示内容を誇り、キャプションの作成など「総合文学展示」においては発展の歴史を示すものであったが、文学者たちの目的が果たされたとは言いがたい。文芸懇話会本来の思惑や、プロレタリア文学への弾圧といった背景のもとでは本当の意味での文学の保護、文学者の地位向上は成らないと言っているだろう。文学、及び文学展示が政治的に利用されかねないということは現代でも十分に留意しなければならないだろう。

このように文学展示は様々な目的のもとで、文学や社会の様相によって変化、発展をしてきたことが分かった。日本近代文学館開館以前より、資料の必要性は訴えられていたが、その実現には長い年月を要したことも明らかになった。この文学展示が戦後どのように発展を遂げていくのか、総合文学館誕生までにはどのような過程があったのかについては次回の論題としたい。

註

- (1) 木原直彦 2017「全国文学館等一覧」(『全国文学館協議会会報』69号p17)では745施設、岡野裕行による文学館研究会公式ウェブサイト中の「文学館一覧」(2024-1-1最終更新、<https://sites.google.com/view/literarymuseum/list>、2024-12-1閲覧)では国内で778施設を挙げている。
- (2) 岡野裕行 2008「文学館研究の転換期—全国文学館協議会の発足と文献数・文献内容の変化—」『日本図書館情報学会誌』54巻4号、pp270-287
- (3) 大木志門 2015「十五年戦争下の〈文学館運動〉—「文芸懇話会」と「遊就館」、そして島崎藤村—」『日本近代文学』92巻、pp77-92
- (4) 大木志門 2016「〈展覧される〉文学—山梨大学「近代文学文庫」所蔵の目録から見る戦前の近代文学展示」『山梨大学教育人間科学部紀要』17巻24号、pp1-10
- (5) 大木志門 2016「〈売買される〉文学—戦前の文学展示と近代文学資料の価値形成についての試論」『山梨大学国語・国文と国語教育』21号、pp84-96
- (6) 駒見和夫 2005「文学系博物館小考」『和洋国文研究』40号、pp67-76
- (7) 橋本繁 1897「紅葉館」『新撰東京名所図会』7編、東陽堂、p74
- (8) 「紅葉会短評」『朝日新聞』1903-12-18、朝刊
- (9) 「紅葉祭」『朝日新聞』1904-12-11、朝刊
- (10) 「昨日の紅葉祭」『読売新聞』1904-12-17、朝刊
- (11) 「二葉亭四迷追悼会」『朝日新聞』1913-7-27、朝刊
- (12) (11)に同じ
- (13) 「主催で漱石の遺墨展覧会を来月開く」『読売新聞』1920-9-12、朝刊
- (14) 伊藤友久 2003「史料紹介 須山賢逸の関連資料(三)—郡青から信南自由大学へ、そして信濃自由大学との関わり」『信濃』55巻7号、p70
- (15) 青葉涼風 1920「大人自由畫展覧會」『絵画清談』8巻8月号、p35
- (16) 「大人自由画 特別参考に文豪の遺墨」『読売新聞』1920-7-14、朝刊
- (17) (15)に同じ
- (18) (16)に同じ
- (19) 会期について「明治の研究から 書誌展覧會」(『読売新聞』1927-1-26、朝刊)では1月24日まで開催とあったが、愛書趣味社(1927)「明治文藝研究資料展覧會目録」(『愛書趣味』2巻2号別冊)には1月19日から23日までと記載されていることから後者の日付を採用した。

- (20) 1927「初めてひらく！ 明治文藝研究料展覧會」『愛書趣味』 8号、p8
- (21) 木村毅 1960「明治本漁りの思い出」『日本古書通信』 25巻4号、pp2-9
- (22) 1927「明治文藝研究料展覧會概況」『愛書趣味』 第2巻第3号、p1
- (23) 22に同じ
- (24) 22に同じ、p2
- (25) 22に同じ
- (26) 鎮目桃泉 1927「明治文藝展覧會に就て」『愛書趣味』 第2巻第3号、p7
- (27) 竹内宇太郎 1927「明治文藝展覧會に就て」『愛書趣味』 第2巻第3号、p6
- (28) (4) に同じ、p6
- (29) 飛田健彦 2016『百貨店とは』 国書刊行会、pp79-82
- (30) 社史編集委員会編 1969『松屋百年史』 松屋、pp180-181
- (31) 木村毅 1960「明治本漁りの思い出」『日本古書通信』 25巻4号
- (32) 「明治大正文豪遺墨品展覧會 来る22日より31日まで銀座松屋に開催」『読売新聞』 1930-10-19、朝刊
- (33) 山宮充 1925「日本近代詩書展覧會並に紀念講演會に就て」『詩岳に登る』 大雄閣、p288
- (34) 「文豪遺墨展」『朝日新聞』 1930-10-28、朝刊
- (35) 島崎藤村「文豪遺墨展の印象」『読売新聞』 1930-10-26、朝刊
- (36) 「文豪遺墨展を観る (一)」『読売新聞』 1930-10-24、朝刊
- (37) 1967「第六回 昭和四二年一二月一二日」『内政史研究資料 第五六、五七、五八集 松本学氏談話速記録 (下)』 内政史研究会、p108
- (38) 1967「第七回 昭和四二年一二月二一日」『内政史研究資料 第五六、五七、五八集 松本学氏談話速記録 (下)』 内政史研究会、p135
- (39) 大阪毎日新聞社、東京日日新聞社編 1934「文藝懇話會起る」『毎日年鑑 昭和10年』 大阪毎日新聞社、p272
- (40) 菊池寛 1934「話の屑籠」(『文藝春秋』 5月号)によると1933~1934年にかけての文士賭博事件を受け、対応に追われた菊池は「同じ内閣の一人の役人から、不愉快な目に逢はされながら、他の役人との懇談會に出るなどは、イヤだから、今後は松本警保局長の會には出ないことにする。松本さん個人は、たいへんいゝ人だと思つて、尊敬してゐるけれど。」とある。
- (41) 広津和郎 1974「続年月のあしおと」『広津和郎全集 第十二巻』 中央公論社、p331
- (42) 文芸懇話会の性質について、徳田秋声の発言や機関誌の政府批判的記事の掲載などといった要素から当初の政治色はほぼなくなったという見方、会は本質的なファシズム批判には至っておらず中庸的、もしくは賛成的であるとする二方向の見方ができる。当時の文学者たちが、太平洋戦争以前にどのように言論統制やファシズムを実感、理解していたのかは、推測するに困難な部分もあると思われる。文芸懇話会の成立と内実に関しては、榎本隆司(1961)「文芸懇話会—その成立事情と問題点—」(『国文学研究』 25巻)、

- (1962)「文芸懇話会と大衆作家の動き」(『日本文学』11巻6号)や、海野福寿(1981)「1930年代の文芸統制—松本学と文芸懇話会—」(『駿台史學』52号)、和田利夫(1994)『昭和文芸院顛末記』(筑摩書房)などが詳しい。
- (43) 「先ず物故文人の慰霊祭 昨日文芸懇話会で決定」『朝日新聞』1934-6-28、朝刊
- (44) 「物故文藝家慰霊祭 祭主は松本全警保局長」『朝日新聞』(1934-9-20、朝刊)によれば「島崎藤村氏が提唱した文藝記念館設立の一準備工作として「文藝家追慕展覧會」が二十日から二十七日迄三越で開かれる」とある。
- (45) 44に同じ
- (46) 副田賢二 2007「痕跡としての「文学」—文芸懇話会における文学〈展示〉の様相」『近代文学合同研究会論集』4号、pp49-50
- (47) 保高德蔵 1934「文藝家追慕展覧會を見る」『文藝』2巻11月号、pp38-45
- (48) 47に同じ
- (49) 47に同じ
- (50) 徳田秋声「文藝家遺品展覧會(一) 閑却され勝ちな文人」『朝日新聞』1934-9-23、朝刊
- (51) 中里介山 1937『非常時局論』隣人之友社、p97
- (52) 中里介山 1932『大菩薩峠形訳脚本』大菩薩峠刊行会、pp2-8
- (53) 笹本寅 1956『中里介山 大菩薩峠』河出書房、pp143-153
- (54) 51に同じ
- (55) 田中菊次郎 1941『多西丘陵遊歩道と大菩薩峠記念館』山水荘、pp1-34
- (56) 市河三喜 1934「小泉八雲記念館」『博物館研究』7巻3号、pp11-12
- (57) 「草籠」『読売新聞』1940-11-23、朝刊
- (58) 「漱石遺墨 今明日展観」(『朝日新聞』1920-10-9朝刊)の記事によると、漱石遺墨展覧会では「階下には書、階上には畫や原稿の類が陳列され」とある。

〈図1〉小川一真出版部 1911『東京風景』

国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/764167> (参照 2024-12-07)

〈図2〉1927「愛書趣味」明治文藝研究料展覧會概況『愛書趣味』第2巻第3号、p5

〈図3〉1927「愛書趣味」明治文藝研究料展覧會概況『愛書趣味』第2巻第3号、p9

〈図4〉中里介山 1932『大菩薩峠』第10巻、隣人之友社、巻頭写真より

(神奈川近代文学館職員)